

一八八四年九月二十六日(金)

サーダーラン・ブラフマ協会サマージにおける聖ラーマクリシュナ——ヴィジヤイ・
ゴースワミーに対する教訓

タクール、サーダーラン・ブラフマ協会サマージへ

〔校長、ハズラー、ヴィジヤイ、シヴァナート、ケダル〕

今日、聖ラーマクリシュナはカルカッタの市内においてになった。サブタミー・プージャの日、
一八八四年九月二十六日、金曜日。タクールはお忙しい。秋の大祭——首都(カルカッタ)に住むヒン
ドゥー教徒の家々では、今日、大実母マのサブタミー・プージャがはじまる。タクールはアダルの家に
祀つてあるマーの神像をお詣りし、楽しいお祭りの集どいに出席される予定だ。また、もう一つの目的
は、シヴァナート氏にお会いになることである。(訳註、サブタミー・プージャ——秋のドゥルガー・プージャの
お祭りの一つ)

およそ正午ひるころから、校長は傘を一本手に持って、サーダーラン・ブラフマ協会サマージの礼拝堂前の道を行
きつ戻りつしていた。一時を打つても、二時を打つても、タクールはまだいらつしやらない。くたび

れるので、マハーラナヴィシユ氏の施療所の石段に、時々腰を下ろした。そして、ドゥルガー祭りを祝う子供たちの喜々とした様子や、老いも若きも祭りのことで忙しそうにしている有様を眺めている。

三時になった。少しすぎたころタクールの馬車が到着した。馬車から下りるとすぐ、礼拝堂を見てタクールは合掌礼拝された。ハズラーと他、二、三の信者がお供をしている。校長はタクールにお会いして、お足に額をつけて礼拝した。タクールは、「わたしはシヴァナートの家に行くつもりだ」とおっしゃった。タクールの訪問を聞いて、見る見るうちに数名の協会員が出てきて馬車のそばに集まった。彼等はタクールを、協會員の多くが居住している地区にあるシヴァナート家へとお連れした。しかし、シヴァナートは不在である。さて、どうしたらよいものか？ すぐにヴィジャイ氏、マハーラナヴィシユ氏、その他、ブラフマ協会のお偉方えらかたがやって来てタクールを歓迎した。そしてタクールに、「どうぞ、お坐り下さいまし。もうすぐシヴァナートも来るでしょうから——。間違いなく来るでしょうから——」と言って協会の礼拝堂にご案内した。

タクールは上機嫌で、ニコニコしながら席につかれた。祭壇のすぐ下のサンキールタンが行われる場所に、座席がつくってあった。ヴィジャイはじめ、大勢のブラフマ協会員たちが向き合って坐った。

〔サーダーラン・ブラフマ協会と看板——有形神と無形神の調和〕

聖ラーマクリシュナ〔ヴィジャイに向かって笑いながら〕聞いた話だが、ここには看板がかけてあるそうだね。考カウえの違う人たちは入るべからずズって！ ナレンドラが言っていたよ——〔協会へ

行つてもムダだから、シヴァナートの家に行つたほうがいい」と。

わたしはいつも言うんだが、皆がああ御方に呼びかけているんだよ。お互いに、嫉みや憎しみは無用だ。神様は相すがたを持つてると言い張る人もあるし、いや、神は無相の實在だ、と言う人もある。だから、わたしは言うのさ。『形ある神を信じる人は、そのお姿に心を集中しろ。無相の實在を信じている人は、その無相の實在というものを瞑想していればいい』とね。わたしが言いたいのは、ひとりよがりではなくない、と言うことだ。つまり、『自分の宗教は正しいが、ほかのものは皆、間違つてい』と思うのがよくない。『私の宗教は正しい。だが、他の宗教が正しいか間違つているか、ホンモノかニセモノか、そういうことは私にはわからない』——こう思つていれればいいんだよ。そうだろうじゃないか。神様に直じかに会つてみなければ、ああ御方の相すがたや性質がわかるわけがない。カビール(家評)はいつもこう言つていた——形ある神はわが母、形なき神はわが父、どちらを責めよう、どちらを賞めよう。天秤はかりの両皿、重さは同じ!

ヒンドゥー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒、シャクティ派、シヴァ派、ヴィシュヌ派、それに、古代ひかし、リシたちの時代にブラフマン智を求めた人びとも、今の時代の新興宗教の信者も、皆がみんな一つの本質を探し求めているんだよ。

それで、大実母マは子供たちのお腹に合うように料理をつくつて下さるんだよ。魚が手に入つて、家に五人の子供がいれば、皆にピラフ(プラオ)や脂っこいカレー(カーリア)をつくつてくれるわけじゃない。みんなの胃袋は同じじゃないからね。その子によつては、汁気の多い魚スープにしてくれる。

だがマーは、どの子も皆、同じように愛しているんだよ。

わたしの場合はどういう具合かわかるかい？ わたしや、魚ならどんな料理でも喜んで食べる。女みたいな性質らしいよ！（一同笑う）フライも、ターメリックであしらった魚も、酢づけにしたのも、小魚と野菜の混ぜ合わせでも、何でもござれだ。おまけに頭料理もうまいと思うし、こつてりしたカレーやピラフも大好きだ。

どういうことかわかるかい？ 国と時代と容器（人の理解力）に応じて、神様はいろんな宗教をおつくりになるといふわけだ。どの教義も道ではあるが、教義は決して神そのものではない。だが、熱心に信仰して一つの教義に従っていけば、やがて神様のところへ到着する。教義に間違いがあったとしても、誠実で熱心ならば、あの御方ご自身がその間違いを正して下さる。もし誰かが、心の底からジャガンナートに参詣したいと思つて出発したが、間違えて南へ行かず北の方に行つたとする。すると途中で、誰かがきつと、『おや、ジャガンナートはこつちじゃありませんよ。南の方へ行かなくちゃ』と教えてくれるよ。そして、遅かれ早かれ、目的地へ着くことができる。

だから、他の宗教に誤りがあつても、何もわたしたちが心配することはない。世界の主であるあの

（訳註1）カビール——十五、六世紀のインドの聖者、詩人、宗教改革者。一宗派の開祖となり、その思想の広さにより、イスラム、ヒンドゥー、両教徒から慕われた。彼の著作の邦訳として『宗教詩ビージャクター——インド中世民衆思想の精髓』／橋本泰元訳注（平凡社・東洋文庫703）がある。

御方が、ちゃんと面倒見て下さる。わたしらの義務は、何としてでもジャガンナートに会うことなんだ。お前たちの考えも、もちろんいいともさ。あの御方は相形すがたがたちがないというのも結構だよ。砂糖の衣がのつたお菓子を、真つ正面から食らいついても、横つちよからかじつても、どつちも甘いことは同じだ。

だが、これしかダメと断定してはいけないよ。お前、カメレオンの話を聞いているだろう。ある人が小使しに行つて、ヒョイと上を見ると、樹の枝にカメレオンがいた。あとで仲間のところへ行つて、『おれは赤いトカゲを見たよ』と言つた。彼は、赤以外の色じゃないと固く信じていた。も一人が、やはりその樹のところから来て、『おれは緑色のトカゲを見た』と言う。この人は、緑以外の色ではないと信じているんだ。だが、その樹の近くに住んでいる人が来てこう言つた。『君たちの言っていることは皆正しい。しかし、あの動物は赤くなつたり、緑色になつたり、時には黄色にもなるし、時には無色にさえなるんだよ』と。

ヴェーダには、あの御方は一切性サグナにして無性ニルグナであるゝとある。お前たちは、(神は)形相かたちがないと言う。そりゃ一方的だね。まあいいさ。一つのこと本当に正しく理解できたら、他のこともわかつてくる。あの御方がわかせて下さるよ。(その辺にいる二、三のブラフマ協会員を指して) お前たちは、この協会に来る人なら、このお人もあのお人も、みな知っているだろう」

ヴェイジャイ・ゴースワミーに対する教訓

ヴェイジャイはまだ、サーダーラン・ブラフマ協会サマシに属している。その協会の有給説教師の一人なの

であるが、最近は会の規約一切に従うというわけにはいかない。人格神を信仰する人々とも交際しているのである。こういうことがサードラン・ブラフマ協会内の役員との間に誤解を生じているのだ。協会の会員たちの多くも、彼の行動に不満足の意を表していた。タクールは急に、ヴィジヤイの方を見てこうおっしゃった。

聖ラーマクリシュナ（「ヴィジヤイの方を向いて笑いながら」——お前が人格神の信者たちと付き合っているというんで、協会の連中に非難されているそうだね？ ハッハッハッハ。至聖の信者は、不動の知性を持つてなけりやいけない。鍛冶屋の金床かなどこのようにね。金槌かなづちが始終落ちてきて叩かれても、ビクともしないよ。くだらない奴らがお前のことを何と言おうが、勝手に言わせておけ！ 心の底から本気で神を求めているなら我慢できる筈だ。悪い奴らに取り囲まれたら、神を想うことはできないものかね？ 古代むかしのリシたちを見ろ。森の中で、虎や熊やいろんな猛獣に取り巻かれながら、神を瞑想していたんだよ。分らず屋どもは虎や熊みたいなものだ。お前の後をつけて咬みつこうとするだろう。

こういうものによくよく気をつけろ！ 第一に世間的な有力者。金や子分をたくさん持っているから、その気になればお前をやっつけることができる。そういう人のいるところでは、よくよく気をつけてものを言え。多分、そいつの言うことに相槌を打たなけりやならんだろう。次は犬だ。犬がついてきてワンワン吠えるときは、静かに立ち止まって和やわらかい声でなだめることだ。その次が牡牛お牛だ。突きかかってきたら、そいつにも優しい声でなだめてやることだよ。その次に酔っぱらい。もし怒ら

せでもしたら、お前の十四代前の祖先にまで遡さかのほってツベコベしつくく悪口を言うだろう。『叔父さん、景気はどうですか?』と言つてやれ。そうすりゃ、うれしそうにしてお前の横に坐つて、やおらタバコを吸いはじめるだろう。(訳註——いずれも、世の中にいる人間の種類をたとえている)

卑怯な人間に会うと、わたしは用心することになっている。もし、そんなやつが来て、『やア、キセルをお持ちですか?』と言えば、『あるよ』と答えることにしている。

蛇へびみたいな性質の人もいるよ。急に咬かみつくんだ。咬かみつかれないようによくよく注意おし。そうでないと、つい腹を立てて仕返しをしてやりたくなるからね。そういうわけで、時々、徳の高い清らかな人と交際つきあうことがどうしても必要になる。そういう人と付き合うことによって、真実と不真実を区別する力がついてくるんだよ」

ヴィジャイ「その暇ひまがないのです。ここでの仕事にしばられておりまして——」

聖ラーマクリシュナ「お前たちは宗教せんせいの教師だ。ほかの人には休暇やすみがあるが、先生には休暇はないよ。管理人がある土地を整理すれば、地主はまた別の土地を管理するように送りこむ。それと同じで、お前には休暇がないのさ」(一同笑う)

ヴィジャイ「(合掌して)——あなた様、どうぞ私に祝福をお与え下さいませ」

聖ラーマクリシュナ「そんなことは無知な人の言い草だ。祝福は神さまだけがお与え下さる」

〔在家のブラフマ协会会员への教訓——社会生活と捨離〕

ヴィジヤイ「はい。では、何か教訓をいただきます」

聖ラーマクリシュナ「協会の礼拝堂をチラと見まわして）ハハハハハ、こういうのも結構だね！玉石混交というわけだ。宝玉もあるし、ただの石もある（一同笑う）。わたしはあんまり点を取りすぎたのでゲームから外されてしまった（一同大笑）。ノクシヨ遊びを知ってるだろう？ 十七点以上になると外されてしまうんだよ。カード遊びの一種だね。十七点以下でいると、つまり、五点とか、七点とか、十点とかでいる人は利口だ。わたしはせつせと点を取りすぎて外されてしまった。

ケーシャブ・センが邸内で講演をしたことがある。わたしや聞いていた。大勢来て坐っていたよ。女たちはカーテンのかけにいた。ケーシャブが、『おお神よ、何とぞ恩寵を垂れ給え、我々一同、信仰の河に身を投げ入れ、そのままサツチダーナンダの大海に流れ入ることができますように——』と言ったから、わたしは笑ってしまってケーシャブにこう言ったよ。『信仰の河にお前たちみんなが投身してしまつたら、カーテンのかけにいなさる方々の身の上はどうなる？ だから、河に身を沈めても、時々岸に上がってこなけりやならぬだろう。沈みつきりでは困るよ』

そうしたら、ケーシャブやほかの人たちはアハアハ言つて笑いだした。

それでいいんだよ。真面目に心の底から求めていけば、社会生活していても神をつかむことができる。私と私のもの——これが無智だ。神さま、あなただけ、すべてはあなたのもの、これが智識だ。

金持ちの家の女中のような気持ちで暮らせ。いろんな仕事を一切やり、主人の子供を育てて、私

のハリと叫んでいるが、心の中ではちゃんと心得ているんだ——これは私の家じゃない、これは私の子供じゃない、とね。家事全般をしながら、心は郷里くにのことをいつも想っているんだよ。それと同じように、世間についていろんなことをしていても、心はいつも神さまの方へ向けておけ。そして、家も、女房も、息子も、自分のものじゃない、みんな神さまのものだ、としつかり覚おぼえておけ。自分はその御方の召使いなんだということを——。

わたしは、心で捨てる、と言うんだ。世の中を捨てる、とは言わない。無執着で社会生活をし、一生懸命求めていれば、あの御方をつかむことができる」

〔ブラフマ協会サマソと瞑想のヨーガ——Yoga Subjective and Objective (主観的ヨーガと客観的ヨーガ)〕

〔(ヴィジヤイに向かつて)——わたしも目をつむって瞑想をしたことがある。あとで思ったよ。こうして(目をつむって)いても神さまはいなさる。じゃ、こうやったら(目をあけたら)、神さまはいなさらんか? わたしは、目をあけても神がすべてのものに宿っていないのが見えるんだよ。人間、動物、草木、月や太陽にも、水にも、土にも、あらゆるものにあの御方はいなさる〕(訳註——ブラフマ協会サマソでは、目をつむって瞑想していたので、このように言われた)

〔シヴァナート——ケタル・チャトジェー氏〕

「どうしてこんなにも、シヴァナートに会いたいのかなあ? 長い間神を想いつづけている人には

根性しんがある。その人には神の力が宿しんってくる。それから、歌がうまい人、楽器の演奏がうまい人、ほかにも何か一芸に秀でた人も根性しんと神の力を持つている。これはギーター(原典註1)の考え方だがね。チャンディーでは、大そう美しい人のなかにも根性しんと神の力がある、としている。(ヴィジヤイに) アハ、ケタル(原典註2)は、何ていい性質だらうね！ わたしの所に来さえすれば、すぐ泣くんだよ！ だから二つの目は、いつもチャナバラ(シロップに浸した赤い色の菓子)みたいに赤く濡しれている！」

ヴィジヤイ「あちら(タッカ)では、いつもあなた様の話ばかりで、あの方はあなた様のところへ行きたくて、年中ジレジレしておられて！」

間もなく、タクルは帰ろうとなさった。ブラフマ協会(サマー)の会員たちは、タクルに合掌(ノモシカル)をした。タクルもまた、彼等に合掌(ノモシカル)を返された。タクルは馬車にお乗りになり、アダル家の祭神を拜むため出發なさった。(訳註、ノモシカル——ヒンディー語ではナマスカール)

(原典註1) 栄光に輝くもの 壮麗(まうれ)なもの 偉大なもの 善美(ぜんび)なものはずべて

わたしの光輝(ひかり)より発した閃光(せんこう)の 一つにすぎないことを知れ —— ギーター 10・41 ——

(原典註2) ケタルナート・チャトジェー——タクルの最もすぐれた信者。その当時は、公務のためタッカに住んでいた。ヴィジヤイ・ゴスワミーが時々タッカへ行くと、必ず彼に会っていた。二人ともタクルの信者なので、互いに会うのを楽しみにしていたのである。